

## 植民地社会の同化と抵抗 ①

### アンドレ・マツワ (1)

コンゴ・オセアン鉄道と平行して、ブラザヴィルからポワント・ノワールまでコンゴの国道1号線が走っている。ブラザヴィルを出て最初の大きな町が、約70km地点にあるキンカラ(Kinkala)で、プール県の県庁所在地である。ここはアンドレ・マツワ(André Matsoua、または Matswa)が生まれたところで、彼は植民地化されるコンゴで、一方でフランスに同化しつつ、もう一方では植民地統治に抵抗するという波瀾万丈の生涯を送った人物だ。

マツワは1899年1月に生まれた。サヴォルニャン・ド・ブラザとマココ王の間で交わされた条約がフランス国会で承認される3年前のことである。カトリック系の学校で4年間の教育を受けた彼は、成績が優秀だったのでさらに上の学校に進み、やがてマヤマ(Mayama)地区の教理問答の教師となる。現地のキリスト教化をはかる教会にとって、現地人の伝道師の育成が急務だったことが影響していたのだろう。小さい頃から好奇心旺盛な性格であった彼は、西洋の文化に対して特に興味を持ち、多くの時間を読書に費やししながら、ヨーロッパの文化・文明に対する知識を蓄えていった。

マツワはその後、ブラザヴィルに出る。仕事でお金を稼ぐことが目的であったようだが、何にでも興味を持つ彼の性格もあったのだろう。20歳の彼は、赤道アフリカの総督府で税官吏の職に就く。税官吏としての彼は、周囲から認められるような仕事ぶりだった。またこの時期、彼と同じラリ族(ラリ語を話す人たちの総称)のエリートたちと接触している。植民地統治において、エリートの養成は原地住民を支配層と被支配層に分ける「分断統治」として重要なことで、エリートの選出は一つの部族に限られることが多かった。コンゴの場合、それがラリ族だったと言えるだろう。マツワは都市での生活を通じて、植民地統治によって引き起こされているさまざまな問題や黒人が直面している厳しい現実を目の当たりにする。そしてそれは、やがて彼の政治的活動の原動力となっていくのであった。

マツワはコンゴでの仕事に満足することなく、さらに見聞を広めるべくヨーロッパ行きを決意する。1921年、22歳の彼はベルギーのアンヴェールに到着。しかしここでは問題も多かったようで、その後フランスのボルドー、次いでマルセイユに移動する。彼がそこで何をしていたのか詳細は不明だ。しかし、リフ戦争(1921～34年モロッコのリフ族の反フランス、反スペイン独立戦争)に「セネガルの狙撃兵」(«Tirailleurs Sénégalais」、黒人をフランスの軍事行動に協力させることを目的として組織された植民地兵の一つ)の一員として参加し、権力者に対しては組織的な反抗運動が有効であることを学ぶのだった。

パリに戻った彼はセーヌ県の病院の会計係の職に就き、フランス市民権を獲得する。知識欲が旺盛であった彼は、フランス政府が植民地から本国にきた現地人のための教育機関として設けていた夜間学校に働きながら通う。ここでも彼はさまざまなことに興味を示し、学んだことを吸収し、やがて白人とも十分互角に渡り合えるような知識を得ていくのだった。こうして少しずつ彼が後

に組織を統率するための基礎ができあがっていく。また同時に、他の黒人の移住者との接触によって、同胞人に対する何らかの援助の手をさしのべる必要性を感じることになる。

リフ戦争からパリに戻ってきて1年後の1926年7月、彼は他の4人のコンゴ人と協力して「アミカル」(Amicale「友愛協会」という組織を設立する。これは、フランスに在住する黒人の相互扶助のために創設されたもので、とりわけ黒人の劣位を是正することを目的としていた。ただ、この組織はフランス本国だけでなく、コンゴや現在の国名で言えばガボン、中央アフリカといったフランス植民地の主要な都市でも支持されるようになり、その活動の中心人物であったマツワはやがて植民地政府から「要注意人物」としてマークされるようになっていく。

アミカル設立から3年後の1929年12月、彼はパリで逮捕されることになる。理由は現金の不正取引の容疑というものであったようだが、それは口実だとも言われている。実際、アミカルの活動の反響が植民地政府の想像よりも大きく、フランス政府は独立への機運に繋がる危険性を感じていたようである。彼の逮捕に先立ってコンゴでは、アミカルの現地責任者が逮捕され4年の懲役刑を受けている。この同志の逮捕に対しマツワは抗議文を送りつけている。逮捕されたマツワの身柄はコンゴへ移送され、翌年にブラザヴィルで裁判が行われた。

1930年4月、懲役3年及び10年のフランス本国の滞在禁止の判決が彼に言い渡された。判決の当日は、ラリ族を中心に裁判所の前で暴動が起き、警察や軍隊が出動するという騒ぎになった。その後もラリ族を中心としてブラザヴィルのあちこちで抗議行動が行われ、白人が多く住む地区ではパトロールが強化された。一連の騒ぎは、植民地統治下のコンゴにおける最初の組織的な抗議運動だったと言われている。この裁判の判決を受けて、アミカルは非合法組織となり、責任者マツワは同じくフランス領であったチャドへ送られることになる。ただ、ここから彼のアフリカ大陸を縦横に行き来する伝説的な行動が始まり、それはやがて「マツワニスム」と言われる救世主再来を信じる宗教に発展していくのだった。

現在、キンカラにはマツワの大きな銅像(写真)が建っている。このキンカラの周辺一帯は、マツワのようにラリ語を話す人たちが多数派を占めている。植民地統治において優遇されていたグループだ。しかし今日、コンゴの北方の勢力が政権の座に就くと、ラリ族のような南の部族はさまざまな面で冷遇されることが多い。この地域には現在でも反政府分子が拠点を置いているようで、しばしば治安の悪化が問題となり、国道1号線のキンカラまでの道のりでさえ封鎖されることもあり、植民地統治の影響は現在も続いているように感じられる。

